



『印度日記——牛とから』
コンピュータの国
小熊英二著
新曜社 2,700円

伝統と超近代が混在するインドで

過酷な自然、多彩な民族構成、絶望的な貧困、悠久の歴史……そんな旧来のイメージに加え、IT革命やグローバリゼーションの波が押し寄せた現代のインドは、新しい時代へと踏み出しつつある。

気鋭の歴史学者である著者がデリー大学の客員教授として招かれてインドに滞在したのは、今年の一月上旬から二ヶ月弱。妻への報告として日記を綴り、電子メールで送った。それがインターネット上に転載されて好評を博し、本書の出版へとつながったという。一部がまだ公開されていたので読み比べてみたが、ほとんど本書の通りだつた。これだけ密度の濃い文章を毎日現地で書き続けた筆力とみずみずしい感性に、まず驚かされる。

インドどころか途上国は初めて、上流

階級の邸宅での二ヶ月に満たない下宿生活、各地への旅行も送迎付きなどと聞くと、それでどこまでインドがわかるのかと疑問に思う人も多いだろう。ところが最初こそ下痢に悩まされ、力車夫にぼられたりするものの、ジーンズに肩までの長髪というスタイルの著者は自然に印度に馴染み、現代インド社会が直面するさまざまな課題を、ナショナリズム、宗教、アイデンティティ、フェミニズム、マイノリティ、テクノロジーなどのキーワードで鮮やかに解していく。従来のインド本にはなかつたクールな手法に、ぞくぞくするような知的興奮をおぼえた。議論で酔えるインドの知識人たちと互角以上にわたりあう場面が頻出するのも、痛快だ。著者が専門とする日本の近代史を彼らの文脈に沿つて語ることで、関心のもたれ方が大きく違つてくる。これまでもいつも抽象的で独善的な議論に巻き込まれてしまつたのは、拠り所となる日本を知らずにきたせいだと痛感させられた。

ギタリストとしてバンド活動を続けているだけに、音楽や芸術についての分析もなかなか鋭く、深い。(評・丸山 純)